

ねりまの文化財

区内・都内の文化財等を訪ねて

文化財係の事業には、皆さんに参加していただき、貴重な文化財等をもとに訪ねるものがあります。今回は、その中からこの春と夏におこなわれたものについてお知らせします。

「わがまち再発見―散歩道を歩く―」

この事業は、区内の文化財等を巡るもので、例年、春と秋におこなわれています。今年度は、7月3日にその1回目を実施しました。

今回は、平成つつじ公園を出発して、広徳禅寺・十一ヶ寺・白山神社の大ケヤキなど10箇所の文化財等をめぐる約4.2キロのコースでした。

当日は天候に恵まれ、午前9時の出発時に



は14名の方が集まりました。

それぞれの文化財等については、学芸員と郷土資料調査員が説明に当たりましたが、参加された方々は、暑さにもめげず熱心に聞いておられました。

「文化財講座」

この事業は、講義と見学を組み合わせたもので、今回は「江戸の庭園―現代におけるその価値をさぐる―」というテーマで7月7日・8日の両日におこなわれました。

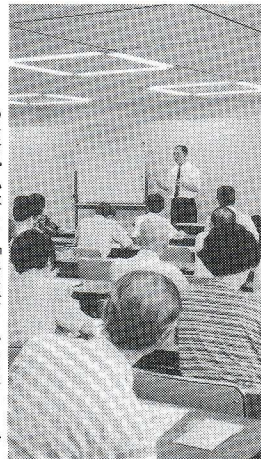
区報で参加者を募ったところ非常に多数の応募があり、抽選倍率は6倍を超えました。

そこで、1回目の落選者を対象とした同じ内容の講座を、8月2日・3日に催しました。

講義は、庭園の専門家であられる千葉大学

練馬区教育委員会
社会教育課
(文化財係)
☎3993-1111 内線 7141
〒176 練馬区豊玉北6-12-1

助教授 藤井英二郎先生にお願いしました。先生は、自作の資料を使いながら、庭園の歴史や種類についての講義を展開されました。参加者の方々からは、「分かりやすい説明だった」との声が聞かれました。



2日目の実地見学は「浜離宮恩賜庭園」でおこなわれました。日頃は立ち入ることのできない「中島の御茶屋」に入ることができ、参加者の方々は、前日の講義の内容を生かしながら、それぞれの興味にあわせて見学をおこないました。

また希望者は、近くにある「旧芝離宮恩賜庭園」にも訪れました。



所沢道 — その2 —

道しるべと庚申塔

文化財保護推進員 瓜生 清

所沢道(旧早稲田通り)が杉並から区内にはいり、拡幅された千川通や環状8号線を渡ると急に道が狭くなる。旧態をとどめながら

屈折して北西に向かい、保谷駅まで区内約5.3キロ、神田多町から23キロ余りの行程である。

所沢道に関する区内の石造物は数少ないが幸いにもすぐ近くの井草八成一帯には、弘法大師巡拝の「石神井道」「東(新)高野道」などの道しるべが多く、貴重である。

(1)下井草3―28 寛保元年庚申塔。「右志やくじ道・南中の道・うしろおそのい道」

(2)下井草2―34 文化9年地藏。「堀の内、雑司ヶ谷など。裏面に志んこうや道」

(3)井草2―16角の地藏堂。左のブロック塀には生まれ文政11年「右志やくじ道」

(4)井草2―24 八成小学校西前の庚申堂台座、寛保元年「右たなか道、左しやくじ道」

寛政5年供養碑「是より右、新高野道」等環状8号線付近から分かれて北上していた

田中の長命寺道は、8号線に並行したため多く廃道となったが、途中の旧田中村名主門、旧琵琶橋付近のみあい橋・長光寺橋などは保

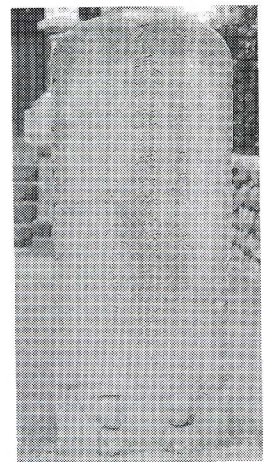
存新設された。

車の激しい所沢道のバス停、石神井1丁目の青楓ストア角から分かれる西の道は、天祖神社(寛文の男女名庚申塔)南の湿地に沿う道で、幕末まで一ツ橋・田安卿のお借場「お鷹番所」の水路。ストア角の元禄9年庚申塔は、工事のため昭和49年三宝寺へ移転。

さらに森の坂下公園を右に見て進むと、道は急に北へ曲がり旧石神井用水の小橋に出る。暗渠上の小道となったが、角の小橋屋自転車店150坪は、江戸期の高札場と郷藏跡年貢米保管と備荒貯穀)である。この辺は大師信仰の石神井道の中心で、上鷲宮福藏院・村南藏院・谷原長命寺・上石神井三宝寺・下石神井禅定院などの巡拝で帰る人の方が多く、神田・新宿への出荷や下掃除の往来で茶店もあったとか。

石神井川(関川)に架かる豊島橋(大川橋)を渡る。北詰に貴重な「石橋供養碑」(宝暦10年は遠く三河国吉良庄から村の内外までの寄付で造立。明治中期の橋改修のとき禅定院門前に移し(写真1)、昭和末の山門改修以後所在が不明になった。

禅定院付近は中世より立地条件が良かったため村のセンターであり、三宝寺も田中の観藏院も石神井合戦前まではここに在ったという。禅定院は元禄の隆音代の前夜より庚申信仰



〈写真1〉

の中心である。試みに半径2キロの円内に区内元禄期の庚申塔30基の半分が造立されている(区内全体で庚申塔103基。区部最多)。

また元禄16年、一村挙げて庚申結衆僧俗200余人の名を刻した梵鐘は戦時中供出。

庚申待衆から光明真言講中へ、さらに昭和初まで晩秋の施餓鬼講には、近在の老若群衆して夜を徹して舞い踊ったという。

寺の右を大きく曲がったあたりが『江戸名所図会』所収、長谷川雪且画の挿絵の所。

このころ、御府内八十八箇所巡拝と共に文人の遊山往来も多く、所沢道(石神井道)や諸道より石神井郷を訪れ紀行文を残した。

禅定院門前左の西の道が所沢道で、道場寺・三宝寺・氷川神社・釈迦本寺先まで伸びる真つ直ぐな道は大正震災後の新道である。このため旧道は禅定院すぐ先のGSより南に大きく半円して再び新道に出て横断し、住友グラウンドの崖下へ通じるが、どういいうわけか入口



<写真2>

から僅か50mは戦後塞がっているようだ。この間の北崖上に元禄4年の庚申塔がある。この先の道は舗装されて新道に出るが、農協前のバス通りや蛸橋は戦後の開通である。

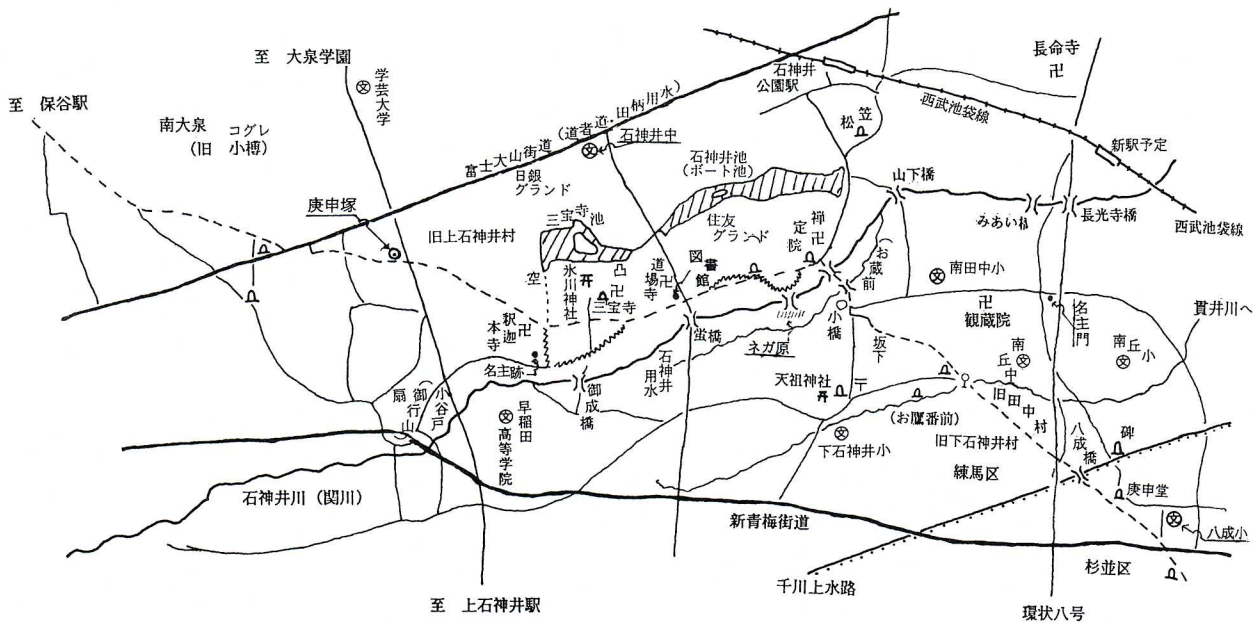
さらに三宝寺前信号を南に渡り、將軍家光お鷹狩の御成橋寄りの道の先より、北に直角に登る坂道がある。石神井城西の空壕跡とも言われ、新道に出る途中の釈迦本寺裏西から蛇行して登る道である。草分名主三千坪の屋敷跡であったが廃道となった。さらに屈折した道は大泉から南下するバス道と交差する角が庚申塚である(写真2)。元禄5年の庚申塔や、正徳元年の真言塔、享保19年の廻国塔の3基や、元文5年の庚申待講の灯籠などがある。通行する地域の年配の人々が掌を合わせ去って行く姿に感銘した。さらに西へ進むと視界が開けて屋敷林と畑となるが、真北に折れると富士街道に出る。西へ50mのバス停を北に横断すると、宝永3年の地藏立像堂裏

よりいよいよ狭い道は屈折分岐して、大泉第二小学校南の小名水溜の低地を経て保谷駅にたどり着く。

保谷駅から先の古道は、新座栗原で清戸道に合し、久留米―上清戸―下安松―所沢となる。

かつて木綿の市が盛大であった。一方、富士街道より七道の継立場田無宿の北西の所沢道は、明治9年には県税指定となり多く活用されてきた。

- 旧早稲田道・所沢道
- ~~~~~ 所沢道旧道
- △ 石造物・庚申・地藏
- ♀ バス停留所



貧しき半農半商の

農民生活と通った道

文化財保護推進員 鈴木 曹元

《沢庵漬け》は庶民が副食としていた。そのため10月から翌年の10月まで、一月ごとに食するように四斗(72リットル)樽の中に、干した大根、米糠、塩、その他で沢庵漬けを作り保管し「沢庵漬け・大根・野菜」を売る必要になった時、牛込御門、日本橋、神田、飯田橋に売りに行った。その帰りに下肥と生活用品を買ってきた。

江戸時代、明治、大正、昭和初期には、大八車に沢庵樽を2つ3つ乗せて下練馬村(練馬区桜台2-1)から江古田二又(練馬区旭丘1-75)二又(豊島区南長崎2-4)目白千登世橋、雑司が谷(目白台2-10)を左折し清土坂(せいどぎか)を下り護国寺より音羽道に入り江戸川橋、大曲、飯田橋、九段に行った。

帰り道は江戸川橋から音羽道で、目白坂を上らず、護国寺を経て清土坂を上った。清土坂では、祖父(明治18年生まれ)は、小学4年生の母(明治43年生まれ)が夕方の4時から6時に車の後押しに来るのを待ってこの坂を上った。そして雑司が谷、目白、江古田二又を通って帰ってきた。

昭和18年、私は自転車にリヤカーを付けてリヤカーの上に祖父を乗せて飯田橋貨物駅に荷物を取りに行くとき、江古田二又、二又、目白、雑司が谷、清土坂、護国寺、音羽、江戸川橋、大曲、飯田橋貨物駅(現エドモンドホテル)に着き、四斗樽2個を受け取り、大曲、江戸川橋、音羽、護国寺、清土坂(この坂を上るには下肥桶5つが限度)を通った。

清土坂の坂道は祖父の後押しで上って雑司が谷、目白、二又、江古田二又と帰ってきた。目白坂は農民が上り下りしてないと私は思う。

「八の釜湧水地は「谷の釜」か?

文化財保護推進員 石 井 薫

区内の湧水地も都市化と共に減少し、現在では数カ所しか残っていない。比丘尼公園の東側、八の釜憩いの森の湧水地もその数少ない中の一つである。今年の猛暑続きの天候の中でも枯れることなく、水量は少ないがこんなと湧きだしている。

ところで、この湧水地名を「八の釜」と呼ぶ人もあり「谷の釜」と呼ぶ人もいる。区の公園緑地課では、八の釜湧水地として説明板を建て、昔この付近は八か所から湧水していたので、八の釜と呼んだと記されている。昔

は湧水している場所を「釜」と呼んだ。現在は二か所は確認できるが、昔八箇所もあったかどうか定かではない。

一方「谷の釜」と呼ぶ根拠は、昔このあたりの土地は、小字で「谷(や)」又は「谷ツ(やつ)」と呼ばれていた。明治10年旧橋戸村地租台帳には「谷」と記されている。また、明治40年には、白子川下流の水車仲間八軒から、この「谷ツ」の湧水を利用するために「宇谷の田地を池地に変更願」が出されている。従ってこの「谷」又は「谷ツ」からの湧水なので「谷の釜」と呼んだのだという。

どちらの呼び方もそれなりの根拠があると思うが、要は、今後この湧水を見学なさる時このような二通りの呼び名があることを想起してほしい。そして、年毎に稀少になってくる湧水をからすことなくみんなで大切に保護していきたいものである。

※ 参考文献 大泉農協四十年史

